

翻訳者になりたい人の必読誌

翻訳事典

アルク地球人ムック

2011年度版



国際救援、歌詞、コミックス、映像祭 etc.

翻訳から始まるSTORY

チャンスはここにある!

翻訳コンテストから始まる プロへの道



これは必読!

翻訳者の頭の中に迫る! 字幕脳と吹替脳

枝廣淳子の環境翻訳入門

翻訳で生きる人・ヒト・ひと

今すぐチャレンジ!

アルク翻訳大賞 誌上翻訳レッスン



巻頭特別企画 対談

翻訳力が磨かれる軌跡 岸本佐知子

×

都甲幸治



スクール情報
求人情報掲載

翻訳スクール **82**校

翻訳会社 **212**社

第19回 JTF 翻訳祭

社団法人 日本翻訳連盟



井口耕二氏

Koji Inokuchi

Profile / 技術・実務翻訳者、社団法人日本翻訳連盟常務理事。東京大学工学部卒、米オハイオ州立大学大学院修士課程修了。大手石油会社を退職し、技術・実務翻訳者として独立。翻訳作業を支援するツールを自作・公開するなど、人とPCの最適な協力関係を模索。業界全体を視野に入れた活動も積極的にやっている。HP <http://buckeye.way-nifty.com/>

第19回JTF翻訳祭レポート

今こそ、脱皮のとき!

～世界同時不況から一年、翻訳業界の進むべき道～

翻訳市場の変化と 翻訳会社・翻訳者が 直面している課題

第19回JTF翻訳祭・講演2より
2009年11月20日開催

実務翻訳業界の団体、(社)日本翻訳連盟が毎年開催している「JTF翻訳祭」が2009年度も開催された。翻訳者や翻訳会社の関係者、ソースクライアントの担当者などが一堂に会し、興味深いテーマでの講演、パネルディスカッション、その後の交流パーティーなど、いずれも盛況のうちに終えた。本誌では、当日行われた講演のひとつを紹介したい。

取材協力：社団法人日本翻訳連盟 取材・文：青山美佳 写真：森脇誠

「三流ホテル」「余分なサービス」 が生まれる背景

井口耕二氏の講演テーマは「翻訳市場の変化と翻訳会社・翻訳者が直面している課題」。近年、翻訳業界で起きている変化と現状を押さえ、その結果、浮かび上がってきた問題を検証しつつ、10年後、翻訳者、翻訳会社、ソースクライアント（以下、クライアント）が幸せになるための道を探る、という内容だ。

井口氏はまず、ここ数年、翻訳を取り巻く変化として、PC能力のアップやツールの普及、インターネットの発展と調べ物の変化、世界不況に起因する発注量の減少、単価下落と納期短縮などがあると紹介。現状として「きちんとした調査に裏打ちされた上質の翻訳を安価に短納期で仕上げるのが求められている」と語った。

しかし、現実はどうか。井口氏は「かなりひどいものがある」として事例を挙げた。例えば、安価なDVDプレーヤーの表示で、「オープン」が「オーボン」に、「チャプター」が「チャボター」になっていた例。あるいは、機械翻訳そのままかとも思われるマニユ

アルの訳文、さらに、ある海外ホテルのHP内に見られた訳文「当ホテルは三流 (three star の誤訳) です」「余分なサービス (additional service の誤訳) を提供します」となっている例などが紹介され、会場から笑いが漏れた。

これらはおそらくネイティブの日本人の訳ではないと思われ、ここまでひどい例は珍しいものの、プロの翻訳者にも誤訳はある。明らかな誤訳が生まれる背景には翻訳者、翻訳会社、クライアントの3者に起因するところがあるのではないかと井口氏は提起し、各者の問題点を挙げた。

まず翻訳者の問題として、「意味内容を考えずに訳していないか」「品質管理は翻訳会社の仕事と思っていないか」などと指摘。「『質を考えずにとにかく訳せばいい!』ではなく、翻訳者は修正の要らない訳を最初から目指すべき」と述べた。

次に翻訳会社の問題点として、「何を求めているか翻訳者に伝えているか」「クライアントのニーズが見えているか」など、見直すべき点を指摘。さらにクライアントに関しては「とにかく安く、と要求していないか」「品質は翻訳会社が確保すべきと考えていないか」と指摘した。

ここで井口氏は、会場に2つの問いを投げた。1つ目は「今、上がってくる翻訳に満足しているか」。「不満」に多くの手が挙がる。2つ目は、今後ほしい翻訳者として、「質は今程度でも大量に速く訳せる人と、スピードは今程度でも上手な人、どちらがいいか」という問い。2対8で、後者に多くの手が挙がった。

「質より量」が向かう先は？

ここで、話は6年前のJTF翻訳祭パネルディスカッションの内容に飛んだ。当時、あるパネリストから、「翻訳メモリで再利用率を高め、単価を削減してコストを圧縮する」「ツールによって効率が向上し、処理量を増やせるので翻訳者も稼ぎを確保できる」と

いう話が出たという。再び、井口氏は会場に問う。「6年前と比べて翻訳者の訳文はよくなりましたか?」「よくなった」に若干、「変わらない」に多くの手が挙がる。

翻訳メモリやツールの導入拡大に伴う納期短縮と単価の低下。これらはすべて「質より量」を求めるメッセージだ、と井口氏。これが今、業界全体を覆う「言葉にならない言葉」で、翻訳者を取り巻く状況は、これにより悪化していると訴えた。

「質より量」が向かう先はどうなるのか。井口氏は言葉を継ぐ。単価が安くなれば量をこなすしかない。すると質は落ちる。実際、中堅翻訳者の質低下という声は多いという。その行きつく先は「耐震偽装」である、と警鐘を鳴らす。井口氏は「納めている翻訳は、鉄筋が少ないものなど絶対にない、と言い切れるか」「鉄筋の本数が少ないと思いつながり納品していないか」と会場に静かに問うた。

さらに、駆け出し翻訳者の月収試算を示し、「生活していくのはかなり厳しい。厳しいところに新しい人材はこない。今後を担う世代が育たなければ業界全体が衰退する」と危機感も訴えた。

安過ぎる仕事には手を出すな!

では、どうするのか? 後半は3者が幸せになるための提言である。

まず、低すぎる単価の原因は翻訳会社と翻訳者にある、と井口氏。結局、安価で受ける翻訳者がいるから、その値段でよいということになる。対応策は、低すぎる単価の仕事は断ること。「それで海外に発注し、品質が悪くて困ると言うのならきちんと金を出すべき」と語り、「翻訳会社は翻訳者に、品質が上がれば単価が上がるという道筋をはっきり示すことが大切」と強調した。

また、翻訳会社に対しては、クライアントと翻訳者のマッチングミス、定型的な修正をフィードバックせずに毎回繰り返す、などを起因とする不要コ

ストの見直しが必要と訴えた。また、クライアントが最終的に必要としているものを把握し、それを実現するための提案をしているか、とも問いかけた。

一方、クライアントに対しては、「翻訳は本来、注文生産の一品モノであり、大量生産の工業製品とは違う。安い値段で発注したら安いなりのものしかでき上がらない。自社の柱にかかわる重要なものは、予算をとり、きちんとした仕事をできる人に出すべきだ」と訴えた。

3者が10年後、幸せになるためにどうしたらいいのか。最終的に井口氏が示した道は、「各々が自分の分担場所において、しっかりとした仕事をする」というシンプルなもの。すなわち、翻訳者は自己研さんと翻訳を支えているという自負と責任を持つこと、翻訳会社はクライアントへの提案力と社内体制を見直してコスト削減を工夫すること、そしてクライアントは翻訳会社からの提案に耳を貸し、翻訳会社任せにしないこと。シンプルだが継続的な努力が必要な道だと言えよう。

COLUMN

「翻訳プラザ」も盛況!

翻訳祭の講演会場とは別会場となる地下1階では、「翻訳プラザ」が開催された。会場は、「展示・デモコーナー」と「書籍・翻訳相談コーナー」に分かれ、翻訳会社、翻訳関連の出版社、翻訳者養成学校など、20余りの出展企業のブースが並んだ。講演とパネルディスカッションの合間の休憩時間を中心に、大勢の人が会場に足を運び、特に「展示・デモコーナー」では、翻訳支援ツールや翻訳ソフトのデモンストレーションが行われ、説明に熱心に耳を傾けたり、質問したりする人、最新の翻訳ソフトを実際に動かしながら確認する人の姿が目立った。



今回取材の講演をはじめ、パネルディスカッションほか、翻訳祭の様相を撮影・収録した「第19回JTF翻訳祭DVD」が発売されています。詳しくは、社団法人日本翻訳連盟(<http://www.jtf.jp/>)までどうぞ。